

若者が引き継いでゆく放射性廃棄物への意識

京都大学 東 邦夫

京都大学工学部の物理工学科に入学してくる1回生約250人に対し、1年に2時限だけ入門的な講義をする機会をいただいている。その最後の15分間を使って、いつも決まって『核分裂反応や核融合反応のエネルギーを人類が利用する事を、君はどのように思い、また感じますか』という題で自由に書かせている。

その中には「いつも爆弾を肌身はなさず持っているようなもの。」とか、「利用すべきだろうけど、個人的には危険そうで、従事したくないのが本音だ。」といったものや、「それは神の領域であり、人間が扱うべきものではない。」とか、「工学的安全だけでなく、倫理的にも安全でなければならない。」といった哲学的で難解な意見もある。また、「何故、無学者達は原子炉廃止を叫ぶのか。」と嘆いたり、「(この分野で大切な役割を果たすべき)日本は今、ナトリウム漏れ事件など起こしている場合ではないのだ。」と叱ってくれたりもする。

出欠票も兼ねているので全員が提出し、10行前後の文章が記されている。そのほとんどに「安全」という言葉が見られるが、それに次いで目につくのが「廃棄物」である。高校を出て間もないこの若い学生達の約3割が、放射性廃棄物や、核の灰や、汚染物を大いに気にしているのである。

原子力と言えば放射性廃棄物を思い出し、放射性廃棄物のことを考えれば、原子力の是非に意識がつながってゆくのであろう。この若者達の世代が中心となって担っている数10年先の社会へも、その気持ちや意識は引き継がれてゆくと思われる。したがって、放射性廃棄物の問題は、今や短期的にも長期的にも、原子力政策そのものの根幹にかかわってきているのである。

原子炉の「安全」については、既に世界中で何1000炉・年にも亘る経験があるし、これから先もずっと、その安全性がどの程度のものであるかを実証してゆくはずである。しかし、高レベル放射性廃棄物の深地層処分は、世界中のどこに於いても実体験のない事柄であるため、それに対してどのような意識が社会の一般的意識として熟成してゆくかが重要である。そしてそれが、これから先の原子力の社会的受容性をも決定しかねないと思われるのである。

上記のような意味からも、この日本原子力学会・放射性廃棄物部会のますます活発な活動に期待するものである。